

絵馬って何だろう？

絵馬といえば、私たちが日ごろ目にするものは神社仏閣に山のように積み上げられた姿、堂のまわりにさげられ、打ち付けられている姿である。そこに描かれている図柄は様々である。

絵馬には、その時代の人々の悩み、苦しみ、怒り、喜び、願いの気持ちが表現されている。なかでも毎日の生活をおびやかす病気、災害、人生の節目となる婚姻、離別、出産、育児、そして自分の意思ではどうにもならない事柄など、具体的な図柄で切実に祈願したもの、感謝の気持ちを表わしたもの、世相を反映したものなどが多い。

絵馬は、今なお私たちに、奉納された時代の人々の願い、生活、地域の歴史などをそっと語りかけてくれる。



▲最古の絵馬（静岡県浜松市伊場遺跡出土）
奈良時代後期（縦7.3 cm、横8.0 cm、厚さ0.5 cm）
（写真提供 浜松市博物館）



▲土馬（土製馬形 千葉県印西市北の台遺跡出土）
（千葉県立房総風土記の丘所蔵）

絵馬の起源と変遷

古くから馬は神聖視され、人の力を超えたその能力に対して、人々は信仰に近いものを抱いていた。古代の人々は、生馬を神に捧げ、古墳時代には、生馬献上のつづくなか、その代用として土馬（土製馬形）や木馬（木製馬形）などの馬形を献上することも行われていた。奈良時代から平安時代になると、馬形は呪術的祭祀として発達した。次に、馬形に代わるものとして、板に描かれた馬「絵馬」を神社に奉納する習俗になった。このことは平安時代の文献にみられる。現在のところ最古の絵馬は、静岡県浜松市の伊場遺跡から出土したもので、奈良時代後期のものとされている。このころすでに庶民層の間に信仰の道具となっていたようである。

絵馬は、中世末期から近世初頭になると奉納形式や形状、図柄が大きく変わってくる。神社だけでなく寺院にも奉納されるようになり、図柄も馬以外のものが現われ、大型化したものが出現する。形態も扁額形式の絵馬、いわゆる大絵馬として発達し、しかも芸術的色彩をつよくもち盛況を呈していった。奉納絵馬が流行すると、拝殿や堂には収容できなくなり、絵馬堂が造られ、そこには、馬の図だけでなく参詣図、境内図、武者絵、歌仙絵、船絵馬、武具絵馬、算額、風景図などさまざまなものがみられる。

現在品川区内には、旗岡八幡神社（旗の台3丁目）に絵馬堂がある。この付近は空襲に遭って焼失しているが、この絵馬堂だけは焼け残った。

大絵馬が発達した一方、中世以来の小型の民間信仰の要素を盛りこんだ小絵馬も、庶民に受け継がれ、心をこめて奉納されていた。



▲旗岡八幡神社 絵馬堂

大絵馬と小絵馬

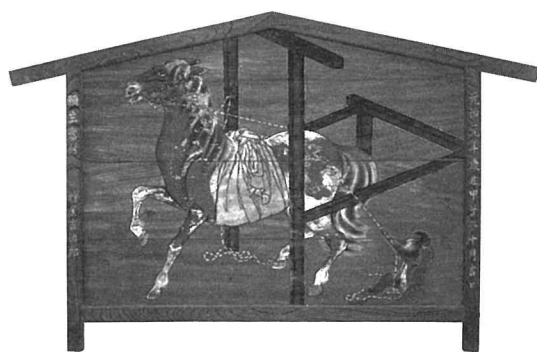
形の上からの分類であるが、比較的大きな扁額形式のものを大絵馬、小さい吊懸^{つりかけ}形式のものを小絵馬と呼んでいる。両者に通ずるものもあり、一概には言えないが、現在その目安として30cm以下のものを小絵馬と呼んでいる。

大絵馬は、奉納する者の経済力や地位を大衆の前に表わすと同時に、画題もその当時の人々にとっての大願成就と結びついていることが多く、写実的であるため、大絵馬の画題と時代を知ることにより社会情勢の変遷をたどることができる。また、専門の絵師か画家によって描かれることが多く、美術的価値が高いものも多く見られている。

小絵馬は、古代より絵馬本来の意味を持ち続けて現代に至っている。そこには庶民の切実な願いがこめられ、神仏に祈願、報謝の内容が場所、奉納者によって様々な図柄で描かれている。その表現の中には、謎解きや語呂あわせなどの庶民生活の一端がユーモラスに描かれているものもみられ、謎解きもおもしろい。

現代の絵馬

明治時代においても絵馬奉納の習俗は続き、品川区域でも盛んであった。小絵馬は一種の消



▲大絵馬（旗岡八幡神社所蔵 品川区指定文化財）

耗品としてあつかわれ、奉納という目的を果たすと使い捨てになることも多く、残っているものは少ない。一方、大絵馬は、旗岡八幡神社、戸越八幡神社、海雲寺ほか多くの社寺に残っている。しかし、大正から昭和にかけてその勢いもおとろえはじめ、戦時中には、武運長久、戦勝祈願の軍国絵馬が出現した。戦後生活が安定するにしたがい再び絵馬は注目を集め、奉納者自らが奉納する絵馬とは別に、神社、仏閣側から絵馬を提供するようになった。毎年正月には、その年の干支を描いたもののほか、馬の図、宝船などの絵馬に、交通安全、商売繁昌、合格祈願などの願いごとを書きこんだものを奉納している。図柄は画一的になり、旧来の庶民生活の一端を示すようなものではないが、願いを絵馬に託す民間信仰は根強いことを示し、絵馬は常に時代の世相を反映しているのである。



▲戸越八幡神社所蔵の絵馬